

## 秋晴れは

秋晴れは三日続かず今朝の雨おさへがたきは心のうつり

ぎを

雲行きは怪しいけれど秋空のことゆえ傘は持たずにゆかん

たまこ

時雨るれば檜の笠の文字の色後ろ姿を追って風狂

千種

霜天に音かすかなる橋の上楓橋夜泊寒山寺の鐘

弁慶

カラス鳴く夜に月なく眠りなく思ふ千里に秋は更けゆく

深海鮫鯨

うつりにけるなひたぶるにわたくしの怒りと諦念あきふりやまず

海月

鎌倉の小町通りを我行けば実朝の木の黄葉たしかに

弁慶

この年の黄葉も見つ部屋ごもり百合の実莢のなだりに顕ちぬ

れん

島山の高砂百合の枯れ実莢 軽やかに鳴る風に打ち合い

たまこ

遠山の頂き白くなりにつり紅葉散り舞う奥入瀬の岸

弁慶

土手道のかなたに見えし冬の富士あふことかなふやあと数月

ぎを

空澄まば富士に逢ひたき白妙の峰に茜の光さすとふ

寂

轟なる雷すこし富士はいざひとつの便りこころにしみぬ

れん

神無の月を迎へて聳えたつ富士をはるかに望む幸せ

蘇生

頂に初冠つひのかむかぶの雪見えて雲無き空に霜月の富士

弁慶

越前の浜より遠き白山の雪の頂き朝の陽に映ゆ

真奈

一冊のアルバムとなる思ひ出の中の微笑み雪の詩仙堂

ぎを

気骨ある武士の誉れや詩仙堂左京の辺りの文の香りよ

弁慶

「オロナミンC」の社長が郷土の阿波に建てしでかでかいかい国際美術館 たまこ

故郷は紅葉の盛り我もいつか静心もて帰り見んかな

ぎを

白河の関の紅葉の色映えて西行法師をしのぶ人影

弁慶

冬立つに未だ冷たき朝もなく紅葉も未だ谷<sup>やっ</sup>の緑は

蘇生

谷津々に冬靄深くたち込めて静かに明けゆく鎌倉の朝

弁慶

鎌倉の冬の千鳥は哀れなり雪ははらと磯におつる時

太聖

堤防に釣りの人影薄れきて朝な向うや海は冬へと

蘇生

冬近く西より来たる雨雲に心わびしく雨の時待つ

ぎを

我囲む草の紅葉のセピアいる眼とじる前の尾瀬の湿原

雛菊

伊豆の山楓の色の鮮やかに時雨の後の峠道かな

弁慶

音楽堂に続く坂道に降る時雨 楳の紅葉の色を深めて

たまこ

雨に散るもみじヘッドライトに映されてことさら冬へ急ぐはなぜに

寂

錆びいろを朝な朝なに重ねきて十一月の山は鎮めり

蘇生

霜月の野は一面の草紅葉姫神山に初雪の降る

弁慶

小春日の河原を歩けば葛黄葉ひろがる念ひの末あはれなり

ぎを

ひさかたも光のどけき秋もすえ風ひえて富士雪をかんむり

太聖

立冬をデイゴの花が咲きさかり積乱雲の湧く土佐の空

たまこ

早暁の雨があがりて立冬の日の出が山の錆びを明るむ

蘇生

山道のきびしさ癒す吊花の美人差し指でそおっと揺らす

雛菊

九十九折伊豆の天城の峠道木の下蔭にさねかずらかな

弁慶

ささやかな遺産分けなどけじめ得て百か日なる法会に行かん

蘇生

年々の立法あまた為し終えて六法全書今二分冊

弁慶

来るものはいつかは去るもの人も年も河原の薄は吹く風まかせ

ぎを

朝なさな指が動きてパソコンのスイッチオンにて今日が始まる

蘇生

真萩散る妻恋坂の君の家朝のコーヒー白きカップに

弁慶

世の中に名のある坂は多かれど無縁坂ほど悲しきはなし

ぎを

神島の九十九折の坂を上りきり行路死人の歌の碑に遇う

たまこ

鷗外の「雁」のお玉の住む町の無縁坂なるゆるい坂かな

弁慶

欠礼の許しを得んと印刷の葉書き校了亡父を閲す

蘇生

人生はたよりなきかな生き別れ鯖の味噌煮に決めらるるとは

ぎを

逆光の小枝にひとつ柿の実の風に黒きは孤高にも似て

蘇生

送電塔の中ほどあたりのカラスの巢 小枝にまぢり青いハンガー

たまこ

廃村の夕暮れ近き村はずれカラス勘三郎カアと一声

弁慶

廃村の増えゆく山より街に来て鴉は鳴けり塵あさりつつ

たまこ

ごみ漁る鴉は人に逃げもせて視線あはせず人々は過ぐ

ぎを

からす鳴くからすの話し耳に聴く春から夏に子に語りかけ

太聖

西の空からす消え行く秋の暮れ花摘む野辺の歌思い出す

弁慶

だまされし男ら笑つてみな歌ふアウフ・ヴィーダ・ゼーン リリーマルレーン ぎを

寒風にざわざわと鳴る日の中に椿は固き玉の花芽を

蘇生

宇治橋を渡れば神の庭にして御手洗の水に映る椿よ

弁慶

内宮のその大奥の大玉の砂利の神路を畏みてゆく

蘇生

タロットのカードは「死神」願望は叶はぬけれどもそれが幸運と

ぎを

小夜時雨面影橋の別れから君の幸せ祈る年月

弁慶

我が千首詠まばや年のくるるまで桃李の歌の巡るを待たん

蘇生

君の詠む千首の歌の輝きは古今を凌ぐ歌になるべし

弁慶

十百韻とひやくいん連ねて十歳ととせ桃李ももちよるす千万までも巡りたるべし

丹仙

桃李にて歌に託せし自分史のきざはし千歩余すは七歩

蘇生

千の歌季節は冬になりぬれど春風桃李花開く時

弁慶

春の水夏虹の橋秋の月初冬の千木君に捧げん

真奈

木枯しのなぜかやさしき一号に惑いし木々の錆びは未だに

蘇生

冬枯るるまでの間あいのやわらかき樹林を歩む刻の愛おし

しゅう

里山は色とりどりに紅葉して水の流れも碧き国原

弁慶

帰りなん昔まよひし幻の花野にこの冬果てん頃には

ぎを

月光もとどかぬ垣の間にも明かりて白き帰り咲く花

蘇生

足柄の峠を望む細道にソメイヨシノの帰り花咲く

弁慶

戻れぬと思へば一そう悲しげな花になりゆくおとぎり草は

たまこ

石路の黄はいざなふごとく冬の日にいづれ思ふは心のままに

蘇生

石路咲いて季節の移ろい知る日なりさざ波白き池の面かな

弁慶

またひとつ手術を受けぬ傷を得て歩めば石路の咲く頃と知る

ぎを

門前に老いも若かきも華やぎてなにを祈るや神無月には

蘇生

神をらぬ鶴岡の宮に君と来ておみくじ引けば凶も吉かと

深海鮫鯨

神田川面影橋をわたりつつ妻恋神社の御神籤よむ

弁慶

相成るや師走に向かう神の木は日々の御籤に白き帷子

蘇生

走りゆく福澤先生また一人忘年会の日々に木枯らし

深海鮫鯨

四十年前の友なりこの朝は鶴も歩みて日の春を行く

丹仙

六十年前の友にて名乗りても要を得ずして破顔一笑

蘇生

嵐呼ぶことを誓いし友なれど名を忘れいしままに抱き合つ

やんま

宴あらば酒を交はして言祝がむ蘇生先生千首の快拳

深海鮫鯨

友逢わば酒を交わさん今ならば和歌に俳句に筆ひだり手に

太聖

漸くに明日かも知れぬ千首目の和歌を吟じつボジョレヌーボー

蘇生

千の風千の花舞ふ桃李苑神御座すらし響く言魂

寂

空高く掲げて祝う千成の瓢箪満ちる腰越の里

弁慶

いかばかり相模の海の深きかな千首の歌の母と思へば

真奈

五年余の平らきことを歌いきてたいあんにちに一千首となる

蘇生

十一月二一日よき日かな一千首にも一々の位置

やんま

このよき日君の建てたる金字塔その輝きを仰ぎ見るかな

雛菊

歳月を歌に重ねて陽を仰ぐ生命のまこと蘇る朝

丹仙

重陽と蘇生の号の四文字を和歌にこめたる祝い嬉しき

蘇生

人の世の真は続くことにあり嗚呼貴きかな一千の歌

ぎを

一樹にて森をなす椋の千年に手を触れてみる「いつか必ず」

たまこ

はるかなる千の階言の葉の掌にその重みいとほしみつつ

真奈

言祝ぎの歌に嬉しき朝ぼらけいきいき待つや今日の太陽

蘇生

日は照らむ歌は続かむ人の世の四方に声あり山よ海よと

深海鮫鯨

桃李和歌連作百首歌集

第六八〇一首より六九〇〇首迄

平成一七年十月二七日より平成一七年十一月二二日